

関係者各位

◇ 取材のお願い ◇

平成25年9月

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、10月19日より名古屋・千種区の古川美術館では、特別展「藤森兼明ー祈りの美 イコン・彩飾写本とともに」を開催いたします。また、分館爲三郎記念館も同時公開し、爲三郎記念館秋季特別展「唐長の世界～京唐紙のころ」を開催いたします。

つきましては、貴社媒体にてご紹介いただきますようお願い申し上げます。

敬具

古川美術館 特別展

ふじもりかねあき

藤森兼明

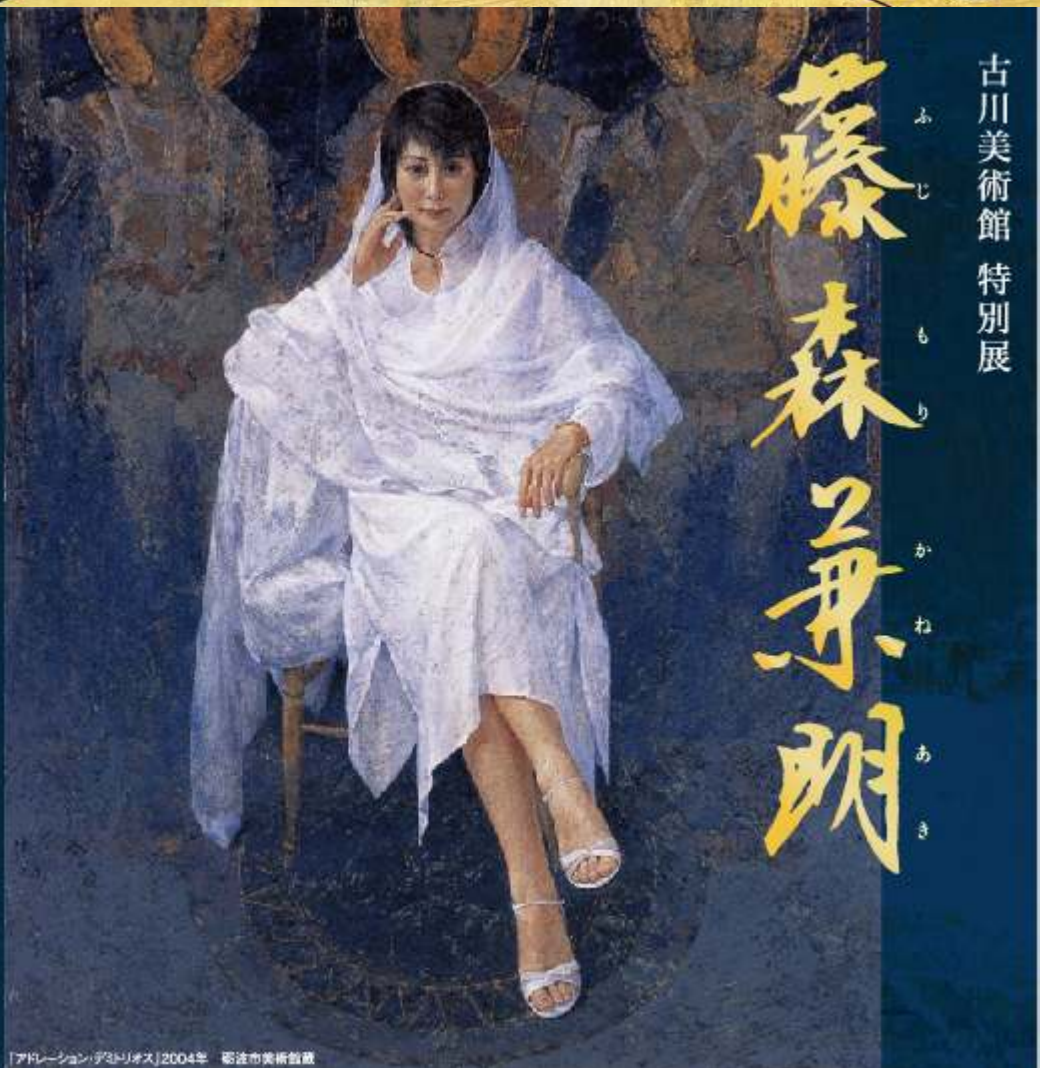
祈りの美
イコン・彩飾写本とともに

「アドレクション・デミトリオス」2004年 姫路市美術館蔵

平成25年 10月19日^土・12月15日^日

世界的に貴重な彩飾写本
特別公開『ブシコー派の画家の時禱書』
1412年頃 古川美術館蔵(4年ぶりの公開！)

■前期・中期・後期とページ替を行います。
前期(10/19～11/4)、中期(11/6～11/24)、後期(11/26～12/15)



平成25年度 古川美術館特別展

ふじもりかねあき

「藤森兼明 — 祈りの美 イコン・彩飾写本とともに」

特別公開『ブシコー派の画家の時禱書』1412年頃(4年ぶりの公開)

現代洋画界を代表する藤森兼明(名古屋在住)の清雅なる祈りの世界を展覧します。1935年富山県砺波市に生まれた藤森は、金沢美術工芸大学油絵科にて高光一也の指導を受けました。就職に伴い5年間のアメリカ滞在を経て名古屋に転居、現在まで日展、光風会を主として活躍しています。中世キリスト教美術と現代女性の肖像とを対峙させたその荘厳な作風は、圧倒的な存在感を放っています。本展では、“祈り”の世界を描き始めた1980年代から現在までの崇高な美の世界をご紹介します。

更に、藤森の敬慕する中世キリスト教美術において、人々に身近な祈りの美であり、聖と俗とをつなぐ祈りの窓であったイコンと彩飾写本を展覧します。イコンの深い輝きと精神性は、藤森作品の創造の源泉となっています。また、鮮やかで精巧な彩飾写本は、藤森自身の祈りにつながるキリスト教徒の祈りの言葉の芸術です。古川美術館所蔵の華麗なる彩飾写本『ブシコー派の画家の時禱書』(1412年頃)も4年ぶりの特別公開！

祈りの美の結晶であるイコン、彩飾写本とともに、燦然とした悠久の輝きを放つ藤森兼明の聖なる祈りの世界をご堪能ください。

会 期	平成25年10月19日(土)～12月15日(日) 全50日間 ※但し、11/4(月・振休)は開館、翌日休館
観覧時間	午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
会 場	古川美術館(〒464-0066 愛知県名古屋市千種区池下町2-50)
主 催	公益財団法人 古川知足会、中日新聞社
特別 協賛	トランコム株式会社、SMBC日興証券株式会社
協 賛	株式会社富山第一銀行
後 援	愛知県・名古屋市各教育委員会、スターキャット・ケーブルネットワーク株式会社
観 覧 料	大人1,000円 高・大学生500円 小・中学生300円 (分館 爲三郎記念館特別展「唐長の世界」との共通券) 【チケットぴあ:Pコード765-800(8/10販売開始)】

■前期・中期・後期(3回分)チケット 2,000円

下記の会期で『ブシコー派の画家の時禱書』(古川美術館蔵)ページ替を行います。

前期(10/19～11/4)、中期(11/6～11/24)、後期(11/26～12/15)

＜藤森兼明 略歴＞

1935年(昭和10) 富山県砺波市庄川町に
生まれる

1958年(昭和33) 金沢美術工芸大学油絵科
卒業 在学中、日展・光風
会展入選

1959-63年(昭和34-38) 工芸会社に入社し、
5年間アメリカに滞在



藤森兼明(撮影:相澤實 ©)

1964年(昭和39) 住所を砺波市庄川町から名古屋市に移す

1974年(昭和49) 日展再出品

1975年(昭和50) 光風会展再出品・奨励賞受賞(1999年までに計8回受賞)

1980年(昭和55) 第12回日展特選受賞(同1984年)

1989年(平成元) 1988年度愛知県芸術文化選奨文化賞受賞

1991年(平成3) 光風会展にて、つばき賞受賞(評議員賞)

1995年(平成7) 第27回日展審査員就任(計6回就任)

1996年(平成8) 日展会員就任

1999年(平成11) 光風会展田村一男記念賞受賞(評議員賞)

2001年(平成13) 第33回日展会員賞受賞

2002年(平成14) 紺綬褒章受章(計3回受賞)

2004年(平成16) 第36回日展内閣総理大臣賞 光風会理事就任
日展評議員就任

2008年(平成20) 日本藝術院賞 日本藝術院会員就任 日展理事就任

2009年(平成21) 光風会常務理事就任 日展常務理事就任 中日文化賞受賞
愛知県教育文化功労者

2010年(平成22) 北日本新聞文化賞受賞

現 在 名古屋市在住 日本藝術院会員 日展常務理事 光風会常務理事

みどころ1

祈りをテーマとする以前の室内女性像の代表作「画室にて」

藤森は金沢美術工芸大学油絵科在学中、人物画を描き日展、光風会に入選します。卒業後は就職に伴う5年間のアメリカ滞在を契機にカトリック信者となります。10数年のブランクを経て、1974年の日展、翌年の光風会出品と画家としての再スタートをきった藤森兼明。出品作として手掛けたのは、学生の頃から取り組んでいた室内女性像でした。その中から再出発後の一つの到達点として、代表作「画室にて」(日展特選)をご紹介します。



「画室にて」1980年 100F(162.0×130.3)
第12回日展(特選) 愛知県美術館蔵

みどころ2

キリスト教徒である自身の祈りをテーマとし始めた1980年代からの、様々な作風の女性像の変遷をご紹介します



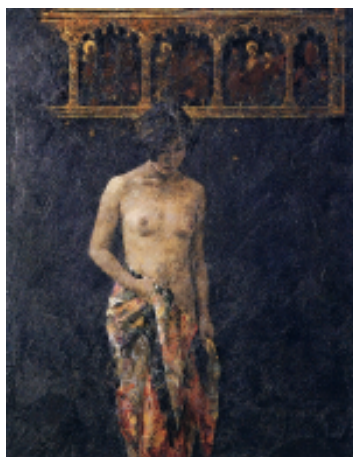
「僧院の午後」1984年
100F(162.0×130.3)
第16回日展(特選) 富山県蔵



「女の季」1988年
120F(194.0×130.3)
庄川美術館蔵



「ビザンチンの光」1991年 120F(194.0×130.3)
第77回光風会展・つばき賞(評議員賞)
庄川美術館蔵



「ALLEGORY」1992年
80F(145.5×112.0)個人蔵



「アマービレ」1997年
20P(72.7×53.0)
砺波市美術館蔵

みどころ3

聖(イコン・永遠なる精神性)と俗(女性・限りある生の輝き)の対峙

1990年代後半になると、背景に中世キリスト教の聖堂に取材したイコンを描き、画面の中央には椅子に座る知的な女性像を配する、独自の様式美を完成させます。金の深い輝きが印象的なイコンは、長い年月を経た壁画の重厚な質感で表され、知的な風貌の女性は現在を生きる生々しい存在として精密に描かれています。

圧倒的な存在感を放つ、格調高い清雅なる祈りの世界をご覧ください。



「ビザンチウムへのオマージュ」
1998年 120F(194.0×130.3)
第84回光風会展 砺波市美術館



「アドレーション・パンタナサ」2001年
130F(194.0×162.0)
第33回日展(会員賞) 個人蔵



「アドレーション・デミトリオス」2004年
130F(194.0×162.0)
第36回日展(内閣総理大臣賞)
砺波市美術館蔵



「アドレーション パプテスト ヨハネ」2006年
130F(194.0×162.0) 第38回日展 個人蔵



「アドレーション・サン・カルタンド」2013年
130F(194.0×162.0) 第99回光風会展
個人蔵

みどころ4

創造の源、イコン・彩飾写本

藤森兼明は、カトリック教徒としての日々の祈りとともに、中世キリスト教の聖堂への巡礼を行い、創造の源としています。

本展では、藤森作品の中で、聖なる存在として描かれているイコン(聖像)、そして、自身の祈りともつながる祈りの芸術、彩飾写本をご紹介します。

◆ 創造の源泉 イコン巡礼 ◆

※中世キリスト教の聖堂への巡礼、正教会のイコン(聖像)の深い輝きと精神性は、藤森作品の創造の源泉となっています。

左:「大天使ミカエル(ギリシアイコン)」17世紀
95.5×71.5 金沢美術工芸大学蔵

右:「ユーガの聖母(ロシアイコン)」近代
31×26.5 金沢美術工芸大学蔵



◆ 彩飾写本～祈りが生み出した彩飾美への畏敬

※藤森作品の創造の礎である自身の祈りともつながる、中世カトリック教徒の祈りの芸術。
藤森は、その鮮やかで精巧な彩飾美へ畏敬の念を抱いています。

世界的に貴重な彩飾写本

特別公開『ブシコー派の画家の時禱書』

1412年頃 古川美術館蔵(4年ぶりの公開!)

■前期・中期・後期とページ替を行います。

前期(10/19～11/4)、中期(11/6～11/24)、後期(11/26～12/15)



「ブシコー派の画家の時禱書」
1412年頃
古川美術館蔵

◆広報画像 キャプション(下記画像)



「アドレーション・デミトリオス」2004年
130F (194.0×162.0) 砺波市美術館蔵
第36回日展(内閣総理大臣賞)



『ブシコー派の画家の時禱書』(「受胎告知」)
1412年頃古川美術館蔵
■前期・中期・後期とページ替を行います。
前期(10/19～11/4)、中期(11/6～11/24)、後期(11/26～12/15)

※本紙掲載の他の作品も広報画像としてご用意できます。
※作品をご紹介、ご掲載いただける場合は、郵送、メールにてデータ送付させていただきます。
お手数をおかけいたしますが、下記までご依頼いただきますようお願い申し上げます。

【お問い合わせ】 公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館
電話052-763-1991 FAX052-763-1994(学芸課)
〒464-066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地
アクセス 名古屋市営地下鉄 東山線「池下」駅より徒歩3分

古川美術館 担当学芸員 鈴木綾子(a_suzuki@furukawa-museum.or.jp)
爲三郎記念館 担当学芸員 早川祥子(s_asano@furukawa-museum.or.jp)
広報担当 学芸課 山内綾子(a_yamauchi@furukawa-museum.or.jp)

◆藤森兼明氏 美術講演会「藤森兼明～画業人生と祈り」要予約

祈りをテーマとする自身の画業や、聖堂・イコン巡礼への思いなどを語っていただきます。

日時:11月28日(木) 13:30～15:00

講師:藤森兼明

会場:ルブラ王山(古川美術館より徒歩5分、地下鉄池下駅より徒歩2分)

参加費:500円(本展チケットが必要です)

申込:古川美術館「藤森展美術講演会」係まで電話でお申込み(先着順)

◆学芸員によるギャラリートーク

日時:10月19日(土) / 11月20日(水) / 12月8日(日)

各日 古川美術館14:00～、爲三郎記念館15:00～

参加費:無料(要入館料)

取材のお願い

爲三郎記念館 特別展

「唐長の世界～京唐紙のこころ」

からちょう

きょうからかみ

日時：平成25年10月19日（土）
～12月15日（日）



開館時間：10時～17時（最終入館は16:30）

休館日：月曜日（但し11月4日（月・祝）は開館、翌5日（火）休館）

主催：公益財団法人 古川知足会 中日新聞社

協力：唐長

特別協賛：SMBC日興証券株式会社

後援：愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会

スターキャット・ケーブルネットワーク株式会社

入館料：大人1000円 高大生500円 小中生 300円

美術館と共通入館券です

於 爲三郎記念館（古川美術館分館）

時代を反映する色 時代を越えて愛される文様

「唐長」文様 【観世水】

【展覧会概要】

江戸時代に創業し、**全国で唯一の唐紙工房「唐長」**の展覧会を開催いたします。

「唐紙（からかみ）」は、文様が彫られた板木（はんぎ）に絵具や雲母（きら）を載せ、手でそっとなでて和紙に文様を写しとって作られます。元は唐の時代に中国からもたらされたもので、平安時代の日本では和歌や物語などを美しく彩る料紙として用いられていました。やがて襖や障子などに用いられるようになり、建築を装飾するものとして用いられるようになりました。唐紙を今も伝えるのは、「唐長」＝唐紙屋長右衛門、江戸時代・寛永元年

（1624）年に創業した400年近く続く唐紙工房です。当代で11代目を数える唐長では、江戸時代から受け継がれた650種余の板木を使い、創業時と変わらぬ方法で、一枚一枚全て手作業で唐紙を作りつづけています。また文化財修復に携わり、桂離宮や二条城の文化財修復の際には襖を制作しています。

本展では「唐長」の唐紙の襖や屏風などを伝統的な数寄屋空間に展示します。和紙の〈地色〉と文様の〈のせ色〉の2色で表現され、**光の加減で雲母がほのかに輝き奥ゆかしさを見せる唐紙の世界**は、周りと調和し使う人に寄り添う心地よい空間をつくりだします。長い年月を経て洗練され、普遍性を持つ文様の美しさと、大量生産では表現できない、手加減によって生み出される唐長の唐紙だけがもつところ。唐長11代目当主・千田堅吉氏と、時代を担う長男・千田聖二氏による歴史と伝統、そして新しい世代の唐長の魂を魅せます。乞う！ ご期待！

■見所 其の壺 “唐紙のある空間を味わう”

長い歴史の中で淘汰され現在に残る唐長文様は、現代にも新鮮で優れたデザイン性を発揮し、その普遍性に驚かされる。

唐紙があることで空間が変わる・・・爲三郎記念館で唐紙の空間を実体験！



イメージ写真

唐長 修学院工房のサロン

アンティークに唐長「瓢筆」の唐紙が
独特の空間を生み出す



爲三郎記念館 邸内「瓢の間」

唐長の「瓢筆文」の朱漆の型押しによる
唐紙

和にも洋にも馴染む唐紙の美しさ

■見所 其の式

“唐長文様に秘められた人々の思いを紐解く”

唐長の文様は唐紙が日本にもたらされた1000年も昔から用いられ、時代を経て淘汰されて残っている。その中でも最も多く蔵するのは「桐」文。かつては高貴な身分の人にしか許されなかった「桐文」が様々に形を変えた。バリエーションの多さは、桐文に憧れた人々の思いの強さの現われでもある。

本展では他に「渦」「唐草」や四季折々の文様を取り上げる。縄文時代の日本、そして遙か海と時代を超えたケルト文様にも見られる「渦文」の呪術性、万物を象った文様の中に秘められた人間の幸福への願い。。。唐紙の設えを通じて、文様に秘められた歴史と人々の思いに心を馳せてみると新たな発見が！

■見所 其の参 “光と影・・・唐紙の陰影”

唐紙のある空間の美しさ、それは光と影が作り出す陰影の美。

本展では、緑豊かな庭園を持つ数寄屋建築の爲三郎記念館が会場。一般の美術館施設では味わえない、自然光による展示空間。

時々刻々と移り変わる光、その光を反射し仄かに輝く、唐紙の絵具や雲母の輝きは、ここでしか味わえない。

また今回は十代目、十一代目、次期当主の3人によるそれぞれの唐紙の色を展示する。同じ板木の文様でも、用いる色の取り合わせによって全く異なる雰囲気醸し出す唐紙の奥深さに魅了される。数々の著名人・・・故・白洲正子氏、随筆家・岡部伊都子氏らに絶賛された11代目の、「泣きたくなるような」桜色の唐紙は必見！！ 同時に時期当主・千田聖二氏の唐紙の色あわせにも新たな時代の息吹が感じられる。



「唐長」文様【枝桜】
左 10代目の「枝桜」
右 11代目の「枝桜」

■見所 其の四 江戸時代より伝わる貴重な板木

唐長で実際に使用している板木を展示。

ところどころ欠けたり摩耗したりしている板木そのものに、400年の歴史の重みを感じる。

そしてその欠けた部分こそが積み重ねられてきた唐長の歴史を伝える

唐紙の美である。

先人が、そして当代が、やがて次の世代が、板木に手のひらをのせ絵具を和紙に写しとっていく。その手のぬくもりを記憶している唐長の唐紙には、
こころが宿っている。



「唐長」文様【細渦】

「唐長」に伝わる板木

関連イベント

スペシャルイベント！

■唐長鑑賞会「京唐紙400年の伝統と美」

講師：唐長11代目 千田堅吉

唐長の11代目が語る400年にわたる唐長の伝統、唐紙にこめられた美とこころ。

理系の商社マンから転身、唐長を継いだ11代目が、身体と手のひらを通して体得した唐紙づくりへのおもいには、日本の伝統、京都が大切に培ってきた日本の美の本質と真髓が込められています。

日時：11月9日（土） 14：00～

場所：為三郎記念館 邸内（ひきごの間を予定）

※参加費無料・但し入館料必要

※13時より記念館受付にて整理券を配布。

整理券は座席券（60名先着）と立ち見券（若干名）の2種類となります。

座席券のない方は立ち見（若干名）となります。

■特別ワークショップ 「唐紙づくり体験講座」

唐長工房の板木（はんぎ）を用いて、伝統の技法で便せんなどをつくります。京都の唐長工房でしか体験できない講座を、特別に本展覧会で実施します！

日時：11月9日（土） 10：00～12：00

講師：唐長 千田聖二

参加費：5000円（入館料は別途必要）

定員：16名（先着順 要予約）

場所：古川美術館 3階会議室



体験の様子(イメージ)

「唐長」文様【枝紅葉】